

山と博物館

第29巻 第7号

1984年7月25日

大町山岳博物館



北ア北部南部夏常駐隊結隊式(7月10日) 県旗を受ける藤原夏雄南部隊長 撮影 嶋田和美

涼風雑感

昭和26年、今の言葉でいえば北の安曇野の自然を愛し山を愛する人々の力により開館された大町山岳博物館は、いまや本邦唯一の存在となり、心のよりどころとなっている。アルプスの深部にあり、山岳文化、地方における民俗の歴史を探究してきた我が博物館は大町市の誇りである。

すぐれた自然とそこに生きる動植物が失われつつあり、大切な水が汚染されてきた。それらを精一杯おし止めようとする力の一つに山博の活動があると私は確信している。

今から21年ほど前のこと針ノ木に自然園をまた扇沢に山岳博物館の分館をとの構想があったが実現しなかった。大町市も今年には市制30周年を迎えた。戦争でゆがめられた自然も人の心も漸く立ちなおし、経済高度成長のハードな時代からソフトな時代へと変わってきた。山博も21世紀に向けていよいよ充実していく中で、山や山博を愛する人々の全国的な組織作りや、自然を正しくみる人々の底辺をより広めて、館の基本方針にあるように、郷土の文化と自然に関する教育の普及活動を急速に高めて行くことが必要と考える。

木崎湖にゲンジボタルが飛び交い、人々が見物にやってくる、緑の湖面を渡る涼風を肌に心地よく感ずる夢の世界が、ホテルを守る会の活動により実現されたことに私は深い感動を覚える。

昨年水と人間の新しいかわりについて木崎でシンポジウムが開かれた折に、カワシンジュガイはもう本州ではこの木崎湖と中綱湖の間の農具川にしか生息していないことを聞かされた。水は生命の母胎であり、水を考えることは自然を根源から問い直すことと考える。大町市を訪れる観光客のアンケートに依れば大町の空気と水と緑がとてまきれいで、また訪れたい声が多いと聞くにつけ、山博の指導的な性格をより以上に発揮されることを願って止まないものである。

(山岳博物館協議会委員 海川善広)

動物を追って

飯島正広

プロの動物写真家としての苦労やエピソードを、と編集部の方から依頼されたものの、今までの撮影を苦労だと考えたことがあっただろうかと思えてきた。動物の撮影というのは、他の分野の写真に比べ、撮影に時間がかかるのは確かだが、それ自体ははたして苦労と言えるだろうか？あつと言う間に十数年近くがたったというのが実感だ。

私がこれまで撮影してきたのは「けもの」で、主に日本の大型のものだ。本州最大の獣と言われるツキノワグマや、里の獣タヌキ、そして山の鯨の異名をとるイノシシ、それに



雪の中のタケオ

コウモリなどだ。昔の動物写真家の先輩たちが、浅く広くとにかく種類を撮影していたのに比べ、最近は一ひと種類のものに何年もわたって、深く追いかけたものでなければ、プロの作品として通用しない時代になってきた。おそらくこれは、動物の生態観察においても同じことが言えるだろう。

ここでは、いかに長時間、動物と深いかかわりを持つかと言うことが大事になってくる。最近では、プロのこういう姿勢を受けて地元のアマチュアもテーマを決めて撮影をするようになってきたが、大変いい傾向だと思っている。

そして私自身も、東京からけもの撮影に通うという生活をやめ、けものの中にいつも身を置いておくため、群馬の奥利根へと居を変えた。そこに住みつくことによって、より深い作品をものにしていくと考えたからだ。時を同じくして、何人かの動物写真家が北海道へ、また九州へと移って行ったのは偶然だったのだろうか？

私が奥利根に移って最初にまとめた作品は、タケオと呼ばれるツキノワグマだった。

ツキノワグマは、どこへ行っても迷惑がられ、今や絶滅の危機に瀕する大型の獣だ。私の住む奥利根では、見かけるチャンスは他県に比べれば多いのだが、生息数の基礎調査すらされておらず、活動時間は朝か夜中が多く、近ずいての撮影はまず無理な状態だった。もちろん、山の中に一カ月や二カ月こ



木に登るタケオ

もれば、黒い点のような野生の熊の写真が撮せるかもしれないし、実際にそうやって撮影もしてみた。しかし、出来上った写真には、熊と言われれば確かにそのようにも思えるゴマツぶみみたいなものが写っているにすぎなかった。

私が熊に対して抱いているイメージは、はたしてこんなものだったのだろうか？私は考えてしまった。そんな時、私はタケオとめぐり会った。タケオは、奥利根の宝川温泉に保護されてきたオスのツキノワグマだ。当時は0才だったが、体長60センチ内外のやんちゃ坊主で、とにかく、一日中その前で観察していてもあきることがなかった。何とかこのタケオを通してツキノワグマが撮れないだろうか？タケオの表情をレンズを通して写し込みたい！そうすれば、山でいくら超望遠のレンズでねらっても撮れないような「クマ」が撮れるはずだ！そう思った私は、温泉の人に頼んで、私自身でタケオの世話をさせてもらうことにした。

撮影の前には、必ずタケオのオリの中へ入



筆者から角砂糖をもらうタケオ

ってタケオの体をさすった。はじめ警戒をしていたタケオが口の中に手を入れても咬まなくなるのにその時間はかからなかった。私はタケオを連れて裏山へ登った。私をグイグイ引っぱるように彼は奥地へ向かった。もちろん、クサリなどはタケオについていない。彼が望めばいつ山に帰ってしまうかわからなかった。温泉のマスコットである彼が、私のために山へ帰ってしまうようなことがあっては大変だった。だから私は、彼が崖をかけ登ればその後を、川を泳ぎ対岸へ渡ればその後を、ついていかなければならなかった。

撮影し始めの頃、カメラのシャッター音に警戒していた彼も私の存在を許してくれたのだろうか、全く私を無視して、彼の好きなように行動してくれるようになった。山で生き生きと遊び回っているタケオを撮影するにつけ、この方法が間違っていないか、ことを確信するとともに、タケオを通して今までわからなかった熊の行動や生態のデータが、少し

ずつ蓄積するようになった。

たとえば、①かつてタケオが山の中で聞いた事もない音に出会った時には、どんな高い木に登っていてもあつと言う間に駆け下りて来て、一目散に山へ逃げ込むくらい音に対して敏感な事、②ペンキや他の獣の糞やカス漬の臭いなどに異常に興奮して、それを体にぬりつけるようにした事、③昆虫のアリが好物で、山の中でアリの巣を見つけるとすばやく掘り起こし、口をつけて食べる事、④山の中のどんな小さな岩穴や樹洞も見逃がさず、必ず一度、自分で入ってみる事などなど、これらはタケオと共にいなければわからない事だった。きつと、山の中で暮らしているタケオの仲間たちもタケオと同じ行動をしているに違いない。いくらタケオが人間に飼われていても、ペットの犬や猫と同じではないからだ。

そして、タケオもだんだん成長し、体重が50キロ近く、立った時の体長がもう私と変わらないようになった頃には、どんな厚手の防寒服で防備しても、タケオに咬まれることたえた。気嫌が悪い時、私がちよつと油断している、あつと言う間にバクツとやられ、一週間は体から青アザが消えなかった。もちろ



藪の中でとくいげなタケオ

ん、それはタケオにとつても攻撃ではなく、友情のしるしなのかもしれないのだが、それにしても力持ちのタケオの事、かげんをすることなど知る由もない。さしあたって苦勞と言うのは、この時の涙が出るほど痛い青アザだったのだろうか。しかし、これとて苦痛ではあつたが、苦勞などではなく、タケオが山の中で生き生きと遊ぶ姿を見ていると、ふきとんでしまった。温泉の主人は、2才をこえると熊は危険だと言いつ張つたが、私とタケオが山でいっしょにいる姿を見れば、私、もう少しは大丈夫だろうと言つてくれた。

このタケオの撮影と平行して、時間があ



藪の中から出てきたタヌキ

タヌキを撮影するために村のあちこちで車を止め、車の後部に陣どつて、窓からレンズを出していると、タヌキはまるで私のことを無視するように目の前で寝込んだり、餌をあさつたりしていた。しかし、これは私が車の中にいる間だけであつて、少しでも車の外に出ようとすると、山から来ていた三十頭近くのタヌキたちは、ここのゴミ捨て場の裏にあるヤブの中にすばやく飛び込んでいってしまった。猟期に村のあちこちでかけられるトラばさみが人間の仕業だと言ふことを知つて、警戒しているのだから。私にとっては、フィールドの中でトラばさみなどのためにタヌキが殺されたら、経済のみを優先した伐採によつて、クマが冬眠する大木を簡単に伐採してしまうというような事の方が、写真を撮ることよりも苦勞に近かつたと言えらるかもしれない。こういった問題に対しては、何もすることができず、いつとも動物写真家としての限界

ば、雪の春山へ地元のマタギと熊の冬越穴めぐりをしたが、どの穴でもすでにクマの姿を見る事はできなかつた。そこで、自動撮影装置と呼ばれるカメラを作り、熊の好物であるミツバチの巣箱にそれをセットすると、野生のツキノワグマの写真を撮ることができた。しかし、その野生の写真を撮るにもあまり感動はわいてこなかつた。自動撮影装置は、動物の写真を撮るうえで、非常に有効な手段ではあるが、自分は夜ねていて苦勞もせずに写し込むわけだから、タケオと共に味わつたような感動はどうも与えられなかつたのだ。

この頃の私は、昼間タケオと山を駆け回つた後、夜は温泉のゴミ捨て場に集まつてくるタヌキの撮影に入つていた。よく動物写真家は24時間営業だと言われるが、まさにその通りだろう。また、私の友人の昆虫写真家たちは、冬の昆虫は越冬だからと言つて、少なくとも夏より仕事の量はへり、フィルム物の整理をする人が多いが、私には雪の中の動物たちを追う仕事が残つていて、



夜水場に来たタヌキ

を感じてしまうが、その不足分を、写真を通して動物たちが身をもって訴えてくれればと願つている。

今まで北は北海道から、南は沖縄の与那国島まで獣や鳥を追いかけて来たが、近年は私のライフワークとして、アジアと言う共通の世界の中で日本を見ようと思うようになった。今は撮影のテーマを「オランウータン」や「サイ」にしぼり、最低三年間かけて撮影しようと思つている。外国では、行く先々で言語の違う人々とのコミュニケーションを持たなければならぬ。学生時代、英語をまともにも勉強しなかつたことの報いが、ここに来てしつかりあらわれてしまったが、現地の人々に熊やタヌキの作品集などを見てもらうことにより、「写真」と言う言葉で不足分は語りに合せているような気がする。今の私のウデでは、とてもとてもプロとしての満足な撮影はできそうもないが、タケオとの体験を原点として、いつまでも「写真」と言う言葉で各国の人々に語りかけられたらと思つている。

(動物写真家・武蔵野市吉祥寺)

木崎湖の漁労今昔

西沢宗夫



口ウヤでとった魚と筆者

木崎湖の漁労についてと云っても、私が幼少の頃より見たり聞いたりした木崎湖と農具川の一部についての様子と、そして実際漁業に携った昭和二十五年以降について記すこととしました。

幼いときに母を亡くした私は、それから小学校へ入学するまでの三年間、父の営む水車の精米所(旧平村役場東南百メートルの農具川端にあった)でその大半を過ごしたので、当時の農具川の様子も今でも記憶に残っております。毎年八八夜になると農業用水確保のため農具川の水を二日間止め、川掃除と湖水の水位を上げて上堰へ送る「つつんぶし」(堤普請の意)があり、その時は魚取りで大変な賑いでした。川の独特な匂いの中で石を崩して「うなぎ」を取るもの、貝を拾うもの、沢にだけ拾い大きな袋に入れて大黒様のように背負っている子供、それは見事な光景でした。

た。また今は陸道になっている大系線の鉄橋の下、三間橋、藤渡橋一帯は赤魚の住みか、五月から七月頃まで毎日中学生(旧制)がヤスで赤魚突きをして、取った魚を木の枝に刺し、腰に下げていたのが今でも目に浮かびます。私の兄も魚をよく取りましたが、木崎湖の出口の首頭橋(津浪閣の東)附近で投網一回で一斗ビク一杯の赤魚を取って来たことを覚えています。また、ある日の夕方、父に連れられて父の友人宅を訪れると、酒の肴にするため前以って準備してあった田ボヤの束(漬柴漁法)を裏の湖水から引上げると、その中から小さな「えび」が沢山取れ、その儘醬油をつけて食べるのを見たものです。「うなぎ」は秋になると海へ下る習性がありますが、私の家では晝間使用した水車の水を、夜は農具川に払うところに藻を仕掛けたものですが、ひと朝に二斗カマス一杯の「うなぎ」を取ったことがあります。今このよう

なことが続いております。おれば「うなぎ」御殿が建ったというものでしょう。木崎湖周辺では、森山崎、稲尾、海の口に夫々地引網があり、農休みとか、村祭り等行事があることに村中総出で引いたものですが、淀鯉の

五本に鮒が和舟に一杯ぐらい取れるのは当り前のことでした。当時農林省と県は、調査研究のための水産試験場を海の口地区に設置してあり、木崎湖で虹ます養殖が行なわれていました。これは禁猟となっていたので地引網を引くたびに職員が立合ったものです。それでも湖岸の葦に隠れて羽虫を餌に釣をした人もありました。木崎湖で虹ますを釣って多勢の人が罰せられた話や、また土用の蒸し暑い日に淀鯉が群れになり背鱗を出して浅瀬に來るのをヤスで何本も突いた活など聞きました。

昭和十八年に河水統制事業が実施されて、木崎湖の漁業は一変しましたが、昭和二十七年頃まではまだ上堰には「しじみ」も沢山おりました。私が勤めた平村役場では宿直の翌日の晝食には皆さんに味噌汁をとりもつことになっておりましたので、その前日晝休みに三十分も拾うと翌日「しじみ」汁が出せたものです。

昭和二十二年に私は海の口へ移籍しましたが、終戦直後の物資の無いときで、養母が弁当のおかずで困り、よく湖水へ行つては穴で手長えびを掬ってきたものです。その頃知人に頼んで漁舟を造ってもらい猟を始めました。そして長い年月先輩の技術を盗み見したり、聞いたりして一人前になったと思っております。三十有余年の間に木崎湖の魚種、漁法もだん／＼変わりました。私が始めた頃は刺網はクレモナ糸(ナイロン)、それ以前は絹糸、四十年代はガラス繊維の網、五十年代はテグス糸となりました。それぞれの網も、その年代には大いに役立ったものです。クレモナの刺網で、ひと朝に二十疋の公魚を取ったのが私の記録ですが、今テグス網を使っても、この記録は破ることは出来なくなりました。

延縄漁法は春から秋まで出来ませんが、一張二百本の針で四十本の「うなぎ」は取れたものです。こんな話があります。漁協の役員が、県へ陳情をしたとき、延縄で取った「うなぎ」

(一匹で二疋もあった)を元知事の林さんに届けたところ「木崎には、こんなのがいるかや」と云って驚いたそうです。今では小さなものをひと朝に三〜四本取るのが精一杯でしょう。ローヤ(竹箆)を湖底に置く漁法は昔から現在まで続き、素人が始めるには一番良い漁法ですが、鮒が主であること、毎日小麦粉、サナギ、米糠を練り混ぜて餌を作らなければならぬこと、いま木崎湖に置かれている数は四〜五十くらいです。その餌も昔は赤土と米糠だけで良かったそうです。

次に魚種についてですが、三十年代において今は殆ど見られないのは、あらめ鯉、きす(海の鱈に似ている)手長えび、貝では「しじみ」。また当時なくて最近物凄い勢いで増えたのがブラックバス、おいかわ、石もろ(もろこの一種)があります。現在赤魚網一反置くと赤魚十匹にブラックバスが四〜五十匹以上刺っております。水中に繁殖したコカナダモは、地引網、延縄、刺網等に非常に厄介な草で漁労を半減しています。

開発事業もその一因かも知れないが、水が汚染され、そこに住む魚の種類までも変つてゆくことを思うとき、一日も早く対策を立て次の世代に引継ぐというものではないでしょうか。(木崎湖漁協役員)

博物館だより

日本山岳画協会展―大町特別展―

7月22日より8月19日まで、地方では初めての催しとして開催されます。期間中は休館日はありません。入館料は平常料金。

山と博物館 第29巻 第7号

発行所 長野県大町市 一九八四年七月二十五日発行

印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館

定価 年額一〇〇円(送料共) 大町山岳博物館

郵便振替口座番号 長野四一三三九九

印刷部